

ありにけり

——日本語雑記・四——

俳句ブームの日本

今、日本は俳句作りがブームなのだという。街の書店には俳句の入門書が櫛比し、関連する月刊・季刊の雑誌もふえていく。諸分野の著名人が俳句作りを始めたという話題も多い。氾濫するフリーペーパーも投句欄を設けることがあり、大規模な組織の機関誌は選者を抱えて作品を募っている。会社・学校・公民館などにもクラブがあり、放送も投句をよびかけ、テレビでは選句と添削の実況放送をする。団塊の世代が大量に退職した二年前ころから、都市の郊外には蕎麦屋がふえたという。蕎麦屋を開くほどの手間も金もかけずに余暇を楽しむ方法に俳句作りがある。俳句

工藤力男

ブームの一因はこれらしい。己が思いを十七音でよむには、余分な語句を削り、和語か漢語か、古語か口語か、品詞はどうするかなど、たゆまぬ思索と推敲がかかせない。そこに日本語を見つめなおす機会がうまれるので、このブームは悪いことではない。

平成廿二年版『俳句年鑑』（角川学芸出版）に掲載された結社・俳誌の数は七百九十であるが、わたしが知っていた年鑑にのらない結社もいくつかある。実数は千に近いのではあるまいか。結社に属せず、開かれた所への投句を専らにする人もあるので、俳句作者の数はおびただしいものだろう。一千万と推測する俳人さえある。

一昨年、「成城 学びの森」のコミュニケーションカレッジの秋冬講座で「日本語の今——姿としくみ——」を講じた時期、わたしはある通信のために「溶解する日本語」と題する短文を草していた。なんだか日本語のあちこちが溶けだしているように思えたからである。その講座の最後の時間には、講義期間中に刊行された水村美苗『日本語が亡びるとき』（筑摩書房）と、その二年前にでた宮坂静雄『語りかける季語 ゆるやかな日本』（岩波書店）を紹介した。水村さんは「英語の世紀の中で」と副題して、国際語たる英語に対して非力な日本語を論じたのだが、亡びる前に日本語の美質が溶けてしまつたら、わたしの愛する日本語とはいえない。そうした趨勢に対して、宮坂さんが注目して「地貌季語」と名づけた地域独特の季語、それを滋しむ心が制御の力になるのではないかと思つた。句作の過程で、季語ばかりでなく日常生活の日本語に対する注意力も涵養されるに違いない。本稿は、そうした思いから、現代俳句の表現を通して日本語を考える小さな試みである。

以下の記述では、「ありにけり」に「をりにけり」も含めて用いる。専門俳人と故人には敬称を省く。紀年は原則として元号により、括弧内では年月日をアラビア数字で横書き

することがある。

氾濫する「ありにけり」

本稿の標題は、平成十一年四月四日に朝日俳壇でみた、次の入選作の下五しもごである。

通夜の灯も星も朧でありにけり

稲畑汀子の選によるこの句をよんだとき、大きな違和感があつた。違和感は、以後この俳壇で頻繁に味わつた。そうした作を、続く三ヶ月の入選作から選者ごとに一句をあげる。

花筏水に夕暮ありにけり (425 鮎山實)

牡丹で虫の出会いにけり (66 川崎展宏)

姦やしく鳴けぬ蛙もありにけり (613 金子兜太)

川音に梅雨入の力ありにけり (74 汀子)

いずれの選者もこの表現を用いた句をとっていることがわかる。選者の一人が鮎山實から長谷川權に交替しても、右の傾向に大きな変化はなかつた。

蠟梅の匂ふ日だまりありにけり (12128 權)

なお、「牡丹」は平安時代末期の辞書『色葉字類抄』に「紅房 ボウタン俗」とある語で、字足らずだったらボウ

タンと読み、「梅雨入」は「ついで」と読むことが俳句界の慣例である。

さて、冒頭の句からうけた違和感の原因は「臚でありにけり」にある。この「臚で」はどうも口語くさい。平安時代末期に近代語の魁として露頭した「にて」の縮約形「で」と、いかにも歌語らしい「ありにけり」とは不釣合いなのである。また、わたしの読みなれている古い和歌に「ありにけり」という表現が思いあたらなかったこともある。それで、以下には大体「でありにけり」と「ありにけり」を区別せず論ずることにする。

初めに「でありにけり」の実例三句を平成十九年春の汀子による入選句からあげる。

初蝶を見し夜の霜でありにけり (3.11)

急に目を病む春愁でありにけり (3.26)

散ることも花の心でありにけり (4.30)

他の選者による入選句にも「ありにけり」は見えるが、汀子選によるものが断然多い印象がある。そこで、朝日新聞のデータベース「聞蔵Ⅱ」によって、「をりにけり」も含めて調べてみた。平成十九年一年間における選者と入選作の数は、汀子選に十七、大串章に十、權に六、兜太に四で

ある。平成十八年十二月十日の汀子による入選作十句のうち三つが「ありにけり」の句である。

わたしの記憶の中の古歌にはなかったこの表現はいつから広まったのか。同じく「聞蔵Ⅱ」で検索すると、昭和六十年から平成六年までは一年間に皆無か一二句、多くても昭和六十四年の五句である。それが、平成九年に五十一と急増してから毎年ほぼ五十前後になり、平成廿年は最多の六十三を記録している。これはいかなること。

当世の俳句界の事情に全く暗いわたしは、何か手がかりがえられるかと、Googleで「ありにけり」を検索してみた。二百三十二万件余の二番めにあがっていた [Kiyose] に見える、昨年十月の「ありにけり論争」が最も有益であった。俳句の初心者らしい筆者（名は英世か）が、師匠（『冬野』の主宰か）と交した話をまとめたものである。それは、下五を「ありにけり」で作りあげる風潮があまりにも目立つ、インターネット句会でも同じこと、このまま許していたら、俳句は十二字でよいことになる。『冬野』（十一月号か）にも甘句近くよまれている、という。そのうえで、次の二つの句を比べて読者はどう感ずるか、と問うている。

鴨渡る荒津の海でありにけり

鴨渡る荒津の海を母として 英世

實在の句と、その後半をかえた句を並べたのだろう。原句の實質は「鴨渡る荒津の海だ」だけなのに、断定の「だ」を「でありにけり」に伸ばしたに過ぎないというのである。同感である。

古歌と「ありにけり」

わたしの違和感の原因を究めるには、和歌における使用の实情を確認しなくてはならない。単なる無智にすぎないのか、実際に用いられなかったのか。用いられなかったのなら、それは偶然か必然か。そこで、国文学研究資料館のデータベース「二十一代集」の歌の本文を調べてみた。二十一代集は、平安時代中期の古今和歌集から、第十五世紀半ば永享十一年の新続古今和歌集までの勅撰集である。

本稿の発端になった「でありにけり」は口語と文語の混淆表現なので、古歌にはあるはずがない。検索対象の「ありにけり」は、「あり」に助動詞「ぬ」と「けり」が接したものであるが、その他の承接例もあわせて検出した数を示す。

ありなまし	14	ありなむ	4
ありなば	1	ありにけり	0
ありにしを	2	ありにしものを	4
ありぬやと	1	ありぬべし	8
ありぬる	0	ありぬれ	0
ありぬ	0		

「ぬ」の活用形の下で太字なのは、推量表現に関わる助動詞「まし」「む」「べし」、過去・回想表現に関わる助動詞「き」「けり」、仮定条件に関わる助動詞「ば」、そして助動詞「や」である。

「ありぬや」一例は、古今和歌集の誹諧歌「ありぬやと心見がてらあひ見ねば戯れにくきまでぞ恋しき」に見える、疑問の助詞「や」に続くものである。これについて、中西字一「動詞性述語の史的展開(2) 態・時」(明治書院『講座日本語学』2『文法史』昭和五十七年)は、「ありなむや」の意で予想を表わすばあいだ、と解釈している。この表現自体が誹諧なのかもしれない。断定的な結論を導くことは難しいが、「ありにけり」のみえないことは確かである。わたしの直感はあたたかい。

「ぬ」は完了の助動詞と称せられるが、近年は文法的な

意味を「確述」とするのが一般である。実現した事態を確かなこととして述べる。「完了」の意味と解するのが自然だが、未実現の事態も表現するからである。その事態は、「ぬ」単独で用いるばあいと、推量・仮定に関わる語ともにも用いるばあいとがある。推量の助動詞と一緒に用いられた、土佐日記の「黒き雲にはかに出できぬ。風ふきぬべし。」(黒い雲が出て来た。風が吹いて来そうだ。)はごくわかりやすい例である。右の表のうちの「なまし」「なむ」などもそれである。単独で用いられた例としては、伊勢物語・第九段の「はや舟に乗れ。日も暮れぬ。」(早く舟に乗れ。日が暮れてしまうぞ。)をあげておこう。

かくて、右の数値は文法書や辞書の記述と矛盾しない。

「ありにけり」の解釈

俳諧における「ありにけり」は、これまで論ぜられることがなかったのだろうか。

山田孝雄よしおの浩瀚な記述文法の書『俳諧文法概論』(昭和三十一年)は、現代俳句を対象にしないが、「ぬ」の連用形「に」の用例十句のうちに「ありにけり」はみえない。阿部魯人の峻厳の極みのような『俳句——四合目からの出

発——』(講談社学術文庫 初出は昭和四十二年)にも言及はない。近年の山西雅子『俳句で楽しく文語文法』(角川選書 平成十六年)は、大いに期待して購入したのだが、これを取りあげることはなかった。

石原八束監修・飯塚書店編集部編『俳句文法入門』(平成元年)は、高等学校の文法読本のような本である。「俳句の文体」の章の冒頭に次の句がある。

川底に蝌蚪の大国ありにけり 村上鬼城

これは、主語と述語が一回だけ成立する「単文句」の例にあげたもので、「大国」の下に主語を示す「が」が省略されていると、とされるだけである。助詞「が」が省略されているというこの説明は、本書の随所にみえる。文語文では単文主格を表示せぬことをしらないのだろうか。

角川書店〈俳句実作入門講座〉4の廣瀬直人編『季語と切字と定型と』(平成八年)には、矢島渚男の「切ること——や・かな・けり」と題する文章がある。

月さして一間の家でありにけり 村上鬼城

著者はこの「ありにけり」が有意義であることをのべ、芭蕉の「秋の色糠味噌壺もなかりけり」といった趣だ、と説明している。論題には「けり」を切字としながら、本文で

は「なかりけり」「ありにけり」を切字としている。これは珍説である。

芭蕉の句の「なかりけり」は、新古今和歌集の三夕の歌の第三句と同じで、「なかり」までが実質的な意味を有し、作者の気づき／詠嘆の情は「けり」が担う。鬼城の句では、「家だ」の連用形「家で」までが実質で、以下はなくてもいい。しかも、文語、口語、文語が交互に用いられている。鬼城はそのことを自覚していないのではあるまいか。

以上、「ありにけり」をとりあげた二書に出あってもわたしの疑問はとけなかった。偶然だろうが、二書の例句の作者が鬼城なので、彼の作品を『群馬文学全集』で読んでみた。大正五年、高濱虚子の序をえてあまれた『鬼城句集』の一千余句のうちに、「ありにけり」を含むのは、「蝌蚪」の句と「家根の雪雀が食うて居りにけり」だけである。が、わたしは他の表現に注目した。「にけり」で結ぶ句が多いのである。その数、六十一。六分近い高率である。しかも、助動詞「ぬ」には本来ありえない承接例もみえる。「老鷹の芋で飼はれて死に、けり」「傀儡師鬼も出さずに去に、けり」。鬼城は「にけり」が大好きだったのだ。

続く二つの句集に「ありにけり」はないが、「にけり」

の類出はかわらない。なお、「月さして」の句は、三つの句集にはなく、補遺のうちにみえるものである。

初出さがして十万句

鬼城という特定の作者を離れた使用状況をみるべく、まず、収載句数の多い角川書店編『合本俳句歳時記新版』（昭和四十九年）を通覧した。そして「ありにけり」十句、「をりにけり」五句をえた。概算一万六千句の内の十五である。この歳時記の発行は、「聞蔵Ⅱ」の検索で五十句をこえた平成九年の三十年前である。

十五句のうちの五句を高濱虚子がしめる。そのうちの三句をあげる。

馬叱る声氷上に在りにけり

添へ干して青唐辛子ありにけり

箒木に影といふものありにけり

作者ごとに作句数も佳作数も違い、編者の好みも絡むので、この数値だけで何かをいうことはできない。だが、残りは一人一句なので、虚子の句の多さはやはり尋常ではない。前節でみた鬼城は、子規と虚子を慕って句作した。その句集の序を虚子がかいていることと、鬼城に「ありにけり」

の二句があることは無縁であるまい。

この表現の歴史がしりたい。特にそれがどこから始まってどのように広がったのか。最初に講談社版『子規全集』によって二万三千六百句をみたが、「ありにけり」には出あわなかった。続いて明治文學全集の『明治俳人集』で一万句ほどをみて、河東碧梧桐編『續春夏秋冬』（明治四十年）の四千句中に一句をえた。碧梧桐に師事した華園塩谷鶴平（しよのや）の作、しかも口語との混淆らしい「筍は貧の盗みでありにけり 華園」である。

次は江戸時代。初めに与謝蕪村、小林一茶、松尾芭蕉の句をみたが、「ありにけり」はなかった。そこで、新旧の日本古典文学大系で俳諧の集成すべて、それに集英社版『古典俳文学大系』十六巻のうち、『貞門俳諧集 一』『談林俳諧集 一』『蕉門俳諧集 二』『化政天保俳諧集』の四冊をみて次の句をえた。作者名と刊年をそえて掲げる。

風折かざをれのみみぢは生いて居をりにけり 南枝（宝永二年）

凧ふうの一日吹ふいて居をりにけり 団友（元禄十一年）

松影のはや月にてぞ有ありける 士朗（寛政五年）

霍龜くわきのうぐひす聞きて居をりにけり 道彦（文化十年）

士朗の句以外は上に動詞のテ形がある。すなわち、補助動

詞として機能しているので、除いて考えるべきだろう。士朗の「にてぞありにける」だけが本稿の対象になる。

もとより、ごく少数の書についての忽々の調査であり、見おとしがあるだろうが、おおよその見当はつけられたかと思う。「ありにけり」は、江戸時代から子規のころまでの俳諧に流行していたわけではないようだ。ごくまれに用いる人があったが、それは単発的だったようだ。これが十数万句を飛ばしよみして得たわたしの見通しである。

『ホトトギス』の言語風景

『村上鬼城句集』に長文の序をよせ、角川書店の歳時記に最多の「ありにけり」がとられている虚子の作品を細かくみる必要がある。毎日新聞社の『定本高濱虚子全集』を通読すると、『ホトトギス』の通算の号数にあわせた「五百句」とそれに続く時代に多く、次第に減少している。初出は、先にもひいた「馬叱る」の句、大正二年の作である。五百句時代の「ありにけり」三例をひく。

葉はがくれに尚散る花のありにけり

老猫の恋のまとゐに居りにけり

裏縁も月影さしてありにけり

鬼城の作品には「にけり」で結ぶ句の多いことを指摘したが、虚子にもある特徴が認められ、次の諸例にそれがみえる——「長梅雨の明けて大きな月ありぬ」「野付牛出でてほつ／＼萩ありぬ」「鏡板に秋の出水のあとありぬ」。先にみた二十一代集の検索結果には「ありにけり」と同じく検出しなかった「ありぬ」終止の多用である。

『ホトトギス』の二代目家元は高濱年尾である。その全集によつて、大正九年から没年の昭和四十九年までに廿二句を得た。一句をひく。

バラ一花上げ鉢植でありにけり

このほかに、「新緑のつゝじに変わりつゝありぬ」など、「ありぬ」好きも親譲りらしい。

本稿の直接の契機になつた稲畑汀子は、虚子の孫にして『ホトトギス』の三代目家元である。「現代俳人文庫」の『稲畑汀子句集』（砂子屋書房 平成六年）には、第三句集の全部と、それ以前の刊行作品から自選した句、併せて七百余を収めている。詳細は省くが、「ありにけり」は年をおつてふえていることがわかる。

虫の闇分つ一燈ありにけり

事よせて節分の日でありにけり

水動き目高は止まりをりにけり

今、この表現を最も多く用いるのが汀子のように思うのだが、第三句集までは昭和期の作で、近年の傾向はよくわからない。そこで上引の『俳句年鑑』をみると、平成廿年の「諸家自選五句」と題して六百九十五人の自選句がせてある。「ありにけり」を用いた俳人は八人、むろん汀子の句もある、「短日に従ふ旅程ありにけり」と。

稲畑汀子編『ホトトギス新歳時記改訂版』（昭和六十一年）は、虚子編『新歳時記』を引きついで半世紀ぶりに改編したものである。原則として同誌の雑詠欄から選んだ例句から一門の作句傾向がわかる。なお、三代の主宰の作品は右の基準とは違うのだという。収載句の正確な数は知らないが、わたしは一万七千と概算した。一読して「ありにけり」七十二句をえた。先にみた角川書店の歳時記と収載句数はさほど差がないのに、「ありにけり」の数は五倍に近い。うち、汀子が十三、虚子が六、年尾が二である。

「あり」と「ぬ」と

文語の完了の助動詞「ぬ」と「つ」はともに一拍語で、動詞の連用形につく対照的な語である。その使いわけにつ

いて研究者のあいだで議論はつきないが、おおよそ「ぬ」は自動詞や非意思性の動詞に、「つ」は他動詞や意思性の動詞につくと理解していいだろう。では、「あり」はいずれの側に属する動詞なのだろうか。

「あり」は存在を表わす語で、アスペクトに関わりをもたないので、動詞というより形容詞に近い性質を有する。このことは江戸時代の研究者がすでに見ぬいていた。近代には山田孝雄が主張したように、これを「存在詞」とするのは理にかなっている。存在は時間の推移による変化を有しないので、一種の状態だといえることができる。古歌に「ありぬ」という完了表現のなかつたゆえんである。先に江戸時代の作にみた「吹いてをりにけり」などの三句では、上接する動詞がアスペクトに関与するのである。

さて、よく知られた現代俳句には、「ありにけり」と形が酷似した表現を含むものがある。高等学校の国語の教材によく採られた三句をあげよう。「桐一葉日当りながら落ちにけり 虚子」「降る雪や明治は遠くなりけり 中村草田男」「くろがねの秋の風鈴鳴りにけり 飯田蛇笏」、いずれも「にけり」で結んでいる。鬼城がこの「にけり」を好んだことを先に指摘したが、「に」が字数を整える機能

しかはたしていないことは明らかである。俳句の下五で「にけり」とある用例はすべて二拍の動詞についたものである。「けり」だけでは字数が不足するとき、最も響きの軽い「に」をつけて五拍に整えたに違いない。「ありにけり」流行の背景にも関わることで、現代俳句にはこうしたことが多い。

『近代俳句大観』（明治書院 昭和四十九年）は近代の三千二百句を選んで鑑賞した本である。前田普羅門、中島杏子^{きょうこ}の「枇杷青し悪童の瞳の澄めりけり」を掲出した箇所^こに、解説者の中西舗土は、「り重ねの句はこの作者の初期以来の手法の一つ」として、下五で「り」の重複する句を九つ掲げている。その中に「鮎の宿秋蚕の一と間ありにけり」がある。

現代俳句協会では俳句のデータベースの作成を進めている。「明治以降の広い意味での秀句、歴史的に価値のある俳句作品を網羅すること」を目指し、この三月廿四日現在、三万六百十七句を収める。「にけり」を含む句がどれほどあるか、数の多そうなくつかの動詞に目星をつけて調べてみた。最多は、「天皇誕生日休日となりけり 金子兜太」など「なりにけり」五十八句である。次が「ありにけり

り」三十八句で、例の鬼城の二句、虚子の「箒木」の句もあり、汀子の句は「地吹雪と別に星空ありにけり」である。第三位の「咲きにけり」はぐんと減って九句にすぎない。

「なり」と「あり」の音声上の差は、句頭の弱い鼻音「n」の有無だけである。これが、語性の大きな差をこえて「ありにけり」を受け入れた契機の一つではないか、とわたしは考える。だが、「ありにけり」は文語短歌にはありえない表現だったのだ。これを文語の一形式として用いたら、それは「模造文語／えせ文語」とでもいうべき、日本語の伝統からはずれた文語である。現代の俳句と短歌には、そうした日本語が溢れているのである。

「ありにけり」同様のえせ文語の一端を、上引の角川書店の歳時記から拾ってみる。

蘭座布団青き千鳥の描きあり 粟津松彩子

住吉に凧揚げぬたる処女はも 山口誓子

春日没る荷馬車の馬の行きつ糞り 石田波郷

菊の芽や読まず古りゆく書の多し 小野宏文

夕風の海岸道路出来つつあり 高濱年尾

年尾の作は、明治期に行われた英語の進行形の直訳さながらである。

『日本語を知らない俳人たち』

本稿を構想してあれこれ読みあさるうち、先年、俳句界で物議を醸したという本に出あった。池田俊二『日本語を知らない俳人たち』（PHP研究所 平成十七年）である。著者は『草の花』『白桃』に属する昭和十五年生まれの人で、雑誌編集の傍ら俳句を学んだという。『草の花』連載の論説をまとめた本書は、現役俳人の実名をあげてその無学ぶりを批判し、全篇これ悪態づくしである。

俳人たちは古典に暗いため、あるいはそのことを自覚せぬゆえの誤りが満ちている。文語文法を理解せず文語めかした俳句をよみ、歴史的仮名遣を無視して表記し、あえて文語と口語を混ぜた意図不明のものがあふり、蝸蚪かど、熔岩ラバなど一般人の知らない語を用いることなどが非難されている。著者の主張を支える理論の多くは、文語文法を荻野貞樹さんに、漢字と仮名遣を福田恆存に拠っている。

著書の前半、文語文法の無智によるとして最も多くとりあげたのは、助動詞「き」、特にその連体形「し」を、過去の事象すべてに用いる誤りである。虚子編『新歳時記』から編者自身の作をあげてその非を衝いた一部をひく。

年玉の十にあまりし手毬かな

萬歳の乗りし竹屋の渡舟かな

寒弾の糸きれはねしひびきかな

本来は回想の意味を担うべき「し」の惨憺たる誤用だとい
うのである。著者は代案を出していないが、多分、それぞ
れ「余りたる」「乗りたる」「切れはねたる」とすべしとい
うのだろう。「たる」は二拍だが、「し」は一拍。俳人たち
は、このありがたい一拍にすがったのだ、とわたしは思う。
その一方で、「ありにけり」などと浪費もしたのだが。

日本語史において、過去の事態に関わる表現の変化は特
に大きい。文語では「き」「けり」「り」「たり」「つ」「ぬ」
と六つの助動詞で表現したが、現代語では「た」「つ」につ
なつた、と概括できる。「き」と「けり」の混同は平安時
代末期に始まって「けり」が衰退した。使用範囲が狭い
「り」は「たり」に押されて姿を消した。「ぬ」と「つ」の
混同は平安時代中期に始まって「ぬ」が勢力を広げ、「つ」
は特定の表現に固定したので、「つ」を的確に用いた現代
俳句にはめつたに出あえない。平安時代後期に衰退した
「き」は、鎌倉時代の歌人を悩ませ、江戸時代の人々を混
乱させたまま、「たり」との違いを弁えぬ現代人の俳句や

短歌に流れこんだのである。

実名で批判された俳人たちの対応の詳細はしらないが、
〔軸俳句会ホームページ〕の「秋尾敏の俳句世界」だけは
覗いてみた。全国俳誌協会会長でもある論客が、主宰誌
『軸』に書いたものを転載した「鳴弦窓雑記」で、該書を
「アブナイ本」と断じている。そして倉橋羊村の反論を紹
介して賛同し、著者は受験文法で俳人を批判した、と斬り
すてた。

池田さんは、荻野貞樹さんから聞いた話として、歌人の
太田行蔵が『四斗樽』という本をかって啓蒙せんとしたこ
とを紹介している。そこで、インターネットに太田行蔵を
検索したところ、『新アララギ』代表・宮地伸一の「短歌
雑記帳」にゆきついた。その中の「し」「る」「たる」をめ
ぐる論に、昭和四十九年の歌会で、太田が「し」と「た
る」の使いわけについて土屋文明に質問して一蹴された場
面が、両人の言葉を再現してかいてある。平成二年二月、
『人間土屋文明論』の著者太田行蔵の逝去をおしんで綴ら
れたこの文章は一読に値する。

これについて宣長の嘆きを見ておこう。筑摩書房版「本
居宣長全集」の『玉あられ』の「詞に三ついひぎまある

事」から、引用符・句読点に手を加え適宜に略してひく。

近世人は、此差別をわきまへず、歌にも文にも（略）「さける」とやうにいふべきところを、「さきし」といふたぐひのたがひ、いづれの詞にもおほし。（略）今咲である花のことを、「咲し櫻」などいふもわろし。そは「さける」とこそいふべけれ。「咲し」とては、前にさきしことを、後にいふになる也。

池田さんは所々で勇み足をした。それが日本語史に対する知見の缺如によることはやむをえないが、専門俳人の急所もよく衝いている。俳人たちはその批判に耳を傾ける謙虚さを欠き、自分の文法力が受験文法以下であることを自覚していない。

俳句はいづこへ

いま流行の「ありにけり」は架空の文語表現である。過ぎさつた時代の言語を作りだす資格がわたしたちにあるはずはない。文語による俳句を作るにはそれなりの覚悟が必要なのだから、この表現を好む人はこの語の由来を学ぶべきである。

本稿では、「ありにけり」を多く用いた『ホトトギス』

への批判が多くなった。だが、わたしが最も大きな期待をよせるのは、一万以上の誌友をもつこの結社なのである。例えば、前出の新歳時記で、「さつきばれ」は梅雨期の晴れ間をいう語だと注意している。その姿勢で「衣被」は「きぬかづき」に戻すべきだし、「地震る」から「地震」を作り、「幼し」から「幼」を作るなど、日本語をけがす表現を許す俳句界を肅清してほしいのだ。

昭和六十二年、『ホトトギス』の稲畑汀子主宰は、有季定形と花鳥諷詠を基礎にすることを宣言して、日本伝統俳句協会を結成した。平成元年八月、俳句には歴史的仮名遣・旧漢字の使用をきめた。もつとも、四年後には印刷所のつごうと若い俳人たちへの配慮から常用漢字の使用に転じたが。伝統を守って歴史的仮名遣によるからには、文語によるのが当然である。かくて文語文法と仮名遣をしらねばならない道理である。

わたしは、種田山頭火の句の世界にも、尾崎放哉の表現にも心がひかれる。確かにこの形でなくてはよめないものがあると思う。だから、自由律も無季も口語俳句もあっていいし、よまれる世界も素材も広がって当然である。外来語がふえると、歴史的仮名遣は適合しにくいし、語形が長

くなくて十七字には収まりにくいことが多いだろう。そうした方針の結社や協会もあるのだから、それぞれの主義を通して競ったらしい。

子規の「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」の句について、『坪内稔典の俳句の授業』（黎明書房 平成九年）には、「柿を食へば鐘が鳴るといふのは、風が吹けば柿屋がもうかる的な一種の謎。その謎が意外性や新鮮さをもたらしている。」とある。あきれた先生である。この人は大学の授業で句会を開き、小学生に俳句を作らせ、あちこちで俳句の講演をする人気者である。「三月の甘納豆のうふふふ」の句で大いに名をうって味をしめ、甘納豆の句を十二月まで作った。この句を高等学校の国語教科書に採用した出版社もある。ことば遊びの楽しさを子供たちに伝えた功績によるらしい。

このように俳句の大衆化が進行するのは真に喜ぶべきことなのだろうか。岐阜市の外郭団体が開催する「一日俳句入門」のチラシは、「オモシロ、かんたん、散歩で俳句」のふれこみで参加者を募っている。甘納豆のようなふやけた俳句を作らせる気らしい。古典のこの字も伝統のデの字も知らずに十七音を並べて何になるというのだろうか。

古代の俳諧歌から純正連歌へ、純正連歌から俳諧の連歌へ、俳諧の連歌から発句へ、その発句が洗練されて四百年、子規の俳句革新から百年、今また新しい俳句が生まれる時が到来しているのだろうか。かかる風潮が蔓延したら、三四を跳びこえて、第五藝術などよばれかねない。

『日本語を知らない俳人たち』の最終章は、近代日本に対する怨嗟と慨嘆の章である。そこには、内藤鳴雪の「元日や一系の天子不二の山」以下、中村草田男、林房雄、及川貞、藤田あけ鳥の一句ずつをあげている。しんがりの藤田あけ鳥は著書池田俊二さんの師匠で、当代の「困った俳人たち」に属せぬ稀有の存在なのだという。あけ鳥の句は左記のものである。

やうやうに水澄む思ひありにけり

（平成廿二年五月）

附記

本稿を成すにあたって、岐阜県図書館の多大な恩恵にあずかった。ここに記して感謝の意を表する。